

知った。その人はタコ人夫になったのではなく、タコ人夫を監視する事に雇われたのであるが、タコ部屋で働いた事には変りない。

その人、Tさん(65歳)に、「タコ部屋」の話聞かせてくれと頼むと、Tさんは、「タコ部屋の話などしたら、あの人達から仕返しされねべが」とまずそれを心配した。それほどタコ部屋の中は凄惨な地獄のような情景であったのであろう。四十五年前の記憶を呼びもどすように言った。

津軽は、大正から昭和にかけて凶作が断続的に続き、農村は疲弊しきっていた。

○大正二癸丑年(一九一三)天候不順、夏寒く稲刈る前に雪が降る。大凶作。反当三斗六升より穫れなかった。

○大正七年(一九一八)富山県に端を発し全国に米騒動起きる。

○昭和六年(一九三一)夏低温、凶作。

○昭和七年水害、冷害による減収。

○昭和九年水害、冷害および台風によって半作。

○昭和十乙亥年(一九三五)八月各地大洪水。

○昭和十六辛巳年(一九四一)夏期低温のため生育遅れ不作。

十二月八日米英に対し宣戦布告して太平洋戦争がはじまった。

(津軽のケガジ物語より)

昭和十七年食糧管理法制定。米は政府の直接管理下におかれた。戦争中の供出、配給制度、米価の統制。米の集荷は農業会、配給は食糧営団

こで働くのが怖くなった。しかし、親方が村から出るのでその権力を頼りにして秋まで働く覚悟をした。

私の仕事は「立ちん棒(タコの監視員)」でした。山の中から手ごろな棒を切ってきて、それを持ってタコが逃げないように監視する役目です。嘉瀬から行った者たちの中で私が一番身体も小さく、気が弱いので、親方は力仕事でなく、そんな楽な役目してくれたのだと思います。しかし、タコを監視するのも決して楽な仕事ではありません。何時逃亡されるか、二三人立ち止って地方言葉で話しを始めれば、逃げる相談をしているのではないかと思ったり、気が休まりませんでした。

K先輩は馬を使ってゴロ引きをやっていました。力も強く、気も荒いのでタコたちは怖がっていたようです。Aも私より年は少ないのだが、身体も大きく力もあり、Kに負けないくらいタコたちを殴りつけます。

私はとても、棒は持っているが、タコを殴ることができませんでした。この飯場の仕事は、水銀の沈殿溜池を造ることでした。現場の奥の山に鉱山があって、公害を防ぐための溜池の築造であったようです。

このタコは、徴用で連れて来られた者で、軍人が戦争で命をかけて戦っているのだから、内地に居る者がこの位の労働をするのは当り前だ、というように幹部たちは考えていたようです。

まずタコが麓の村から現場に来るには、鉱山専用の軌動車に乗せられてきます。そのトロッコは箱汽車で、窓も無く、外から鍵をかけられ、絶対逃げられないようになってきます。箱汽車の扉が外から開けられて、中から徴用人夫がゴロゴロと出て来ます。窒息しそうな箱の中から出されて、まず山の空気に深呼吸をしています。迎える幹部たちは、木刀や棒切れを持って威嚇するように、地面を叩きながら肩をいかせていまし

に行なわせるようになった。

昭和十八年は戦争の真最中で、窮乏生活を強いられていた。中でも食糧不足で一億総空腹時代であった。

Tさんはその年の田植えが終わるとすぐに北海道へ出稼ぎに出た。

《Tさんの証言》

百姓は秋まで収入がないから、土方でもヤマゴ(樵)でも何んの仕事にでも行かねばまいね。

嘉瀬出身のY親方(故人)さかだて(連れて行ってもらう事)北海道さ渡つたら、そこ「タコ部屋」であった。北見の留辺蕊(るべづ)から山奥さ八里も九里も入ったところで、そこには土方の飯場あるだけで、徴用タコが二百人も居であった。

Tさんの話によれば、食糧難の時代なので口減らしのためにも出稼ぎに出なければならなかったそうだ。

その時村から一緒に行った人は、Y親方の弟、古町のK(故人)、駅前A(故人)、そのほかは忘れたが、五、六人の雇い人夫が連れられて行った。

親会社は札幌の逆井組というのだが、Y親方は逆井組の社長の信用が一番厚く、ルベンベ現場一号舎の管理者をしていた。

二号舎もあったが、Y親方は一号舎の親方だから二号舎の親方の上座(かみざ)に座っていた。

各舎には「徴用タコ」が二百人も居て土方をしていた。二百人のタコに対して日本人幹部は二十人程いて、仕事の割り振りやタコの監視、監督をしていた。私はタコ部屋の第一印象は、唯恐しいところだ、と思った。徴用タコが部屋の幹部に袋叩きにされているところを目撃して、そ

た。

まずタコたちのジクを抜いて(肝を抜く)しまうのが第一番なのだ。宿舎に集められたタコたちは持物を全部取上げられてしまった。働くのに余分なものはいらない。親方が預かるのです。この仕事が終わって次に移動する時には返してやるのでしよう。タコたちは、ガヤガヤしながらもアキラメきった表情で幹部たちの指示どおり動いていました。幹部の中には徴用人夫の幹部も混っているのです。

徴用にかけて集められてきた人夫の年齢は十七、八歳から三十五、六歳ぐらいまででした。体格の良い人も居れば、インテリ(知識階級)もいたようですが、日本人幹部から見れば皆重労働をするためのタコにしか見えなかったようです。方言でペラペラしゃべられれば何を云っているかわからないので、幹部の中には徴用人夫も加えているのだと思います。また、タコの中にスパイも密かにもぐり込ませています。それは十七、八歳ぐらいの若い者を手なづけてスパイにして、仲間の動勢をさぐらせていたのです。

ある時、スパイの密告で暴動を未然に防ぐ事が出来ました。二百人のタコが一挙に暴れ出したら、二十人位の幹部では手に負えません。私たちを加えても二十五、六人、日本人は顔色を変えました。まず先手を打つことだということから、主謀者とみられる七、八人のタコを外に呼び出して、メッタ打ちにして半殺し状態にしてみました。そういう見せしめをしながら徴用人夫幹部は方言で、何か説明をはじめ、タコたちを説得しようです。それから何日間も、タコの仕返しはないだろうかと思つて、夜は安心して眠れませんでした。

宿舎は学校の体操場のように広く、障害物もなくひと目で見とおせる

ような建物でした。少人数でも監視ができるように、無駄なものは何も置かない、寝具も敷布団、掛布団各一枚で、夏であったからそれで充分だったようです。私は、田植後から稲刈り前までの約半年間だったので、冬のタコの生活は知りません。昭和十八年、盆の十三日に大雨による洪水で金木の町は流されてしまったと、北海道の空でこのニュースを聞きしました。戦時中で食糧が乏しく、めしにはササゲ豆が入っていません。におかずだって録な物が出ない。山から採れる山菜や海の干物、塩鱒などで、みんなはおかずよりも飯を腹いっぱい喰いたがった。しかし、飯はいつも腹八分目で、食事が終わればすぐ空腹感を感じるほどでした。飲食物については、日本人も同じこと、だが労働の激しさが違うからその分だけタコ人夫よりは空腹感が少ないと思います。食事の時も、仕事に出る時も終る時も点呼をやりませす。一人でも逃げられないように何時も員数の確認です。それに強制徴用者は名前がわかり易くないので番号で呼ばれます。一人一人に番号をつけてあるので、まるで監獄に入った囚人と同じです。

仕事の内容は、力の強い人はトロッコ押しで、土を満載した土工用トロッコを池の中から堤防へ、一日何十回も押し上げる作業です。身体が弱い者とか、ヤキを入れられ（折檻されること）て身体が弱っている者は、木の根掘りとか少しは楽な仕事に向けられます。時間は朝七時から夕方の六時まで、昼休みが一時間という事になっています。昼食は、飯場が現場の傍に建っているのです、そこで喰うわけだが、兎に角タコ達がか数人固まらないように、また、一人遠く離れないようにいつも眼をひからせていなければならぬ。監視人にとって逃亡が一番こわい、それから数人集ってココソコ暴動の相談することも恐いことだ。監視人も心

の安まる時はない。私は他の人たちのようにタコを木刀や棒で殴りつけることが出来ない。なんとか、騒動を起さず、真面目に働いてもらいたいと願うのみだ。

いつか徴用タコが逃げて山を二つほど越えたが力尽きて捕まったそう。タコが逃げれば、直ちに幹部や監視人が麓の村へ手を回して、タコが山から下りてくるのを待伏せする。タコは空腹と疲労でクタクタになり山越えした里へたどりつくには二日も三日もかかる時がある。人里にたどりついて空腹のため泥棒になる者もあるだろうし、兎に角、乗物のあるところを目指して必ずやってくる。そこを待っていて捕えるのだ。捕まったら最後地獄の一丁目である。幹部数人が寄ってたかつて袋叩きにする。それで命のある者は運が強いのだ。そのまま殴り殺されるものも居るそうだ。生かさず、殺さずの折檻はみんなの目の前でやる。無駄な抵抗はやめよ、というみせしめである。

折檻している幹部の顔つきを見れば、まるで地獄絵にある鬼のような形相になっている。手をゆるめれば自分があぶない。という危機感、自分で自分を鬼にしているのであろう。

タコが死んだ後どんな処置をしているのか知らない。警察は一度も山へ入ってきたことはないし、怪我をした時などは、監視人が幹部がついて麓の村の医者に治療に連れてゆくが、タコ部屋の悲惨な生活については、労働過重も、食事や宿泊の劣悪な条件も、誰もが、国策による事業の参加だからという大義名分で片付けてしまっているようだ。

休日は月に一回か二回、形では定められてあるようだが、実際は雨で仕事が出来ない日が休日でした。休日は、日本人も徴用タコもバクチ（賭博）を打つ。カオクというバクチで現金がやりとりされる。

タコ部屋の用語

賃金の支払いは月一回で、当時私たちの日給は二円位だったと思う。タコは三分の一くらいかなあ、よくわからない。
私は稲刈り前には帰郷したが、恐しい体験をしてきたし、自分で手をくたさないまでも徴用タコをいじめた者たちの仲間であったことに、気持ちは落付かなかつた。あのタコ部屋に居た事が知れると、あの人たちの仲間から殺されるのではないかと、変な妄想に取りつかれたり、それらしき人で行き合えば、私に襲いかかってくるのではないかと思ったり、しばらくそんな不安定が続き、タコ部屋で働いてきた事は絶対誰にも云うまい。と心に固く誓った。
Tさんは、四十五年前の話をし終ってほっとしたような顔をして、日本人も悪い事をしたもんだが、これも戦争のためだろう、日本タコ（プロのタコ）はもつと酷いという話も聞いた。と口を結んだ。
北海道では土木工事のほかに炭坑にもタコ部屋があったと聞く。津軽には「ジャグ」という名詞もある。北海道や樺太を股にかけて渡り歩いた荒くれ労務者を云うようである。

娑婆の人間はジャク（あまのじゃくからきたものか）と云われる人を見れば、タコ部屋からはい上ってきた無頼漢でもあるが如く嫌ったものである。

今はそういう昔を語ってくれる古老も少なくなりつつあり、やがてタコ部屋やジャクの言葉も忘れ去るだろう。

○規則人Ⅱ六ヶ月間勤める人夫、契約や規則を守る人夫。

○番 頭Ⅱ幹部。

○試験モッコⅡ五〇貫の重さの玉石又は鉄材等を新入者二人一組で担ぐ

こと、歩く姿や、モッコを上げ下ろしする仕草で、雇うかはねられるか決る。

○飛びつちよⅡ逃亡する。

○飛行機が飛ぶⅡ飛びつちよに成功する意。

○女ギツネⅡ女郎。

○信用部屋Ⅱタコ部屋でない、前借金のつかない一般の土工部屋。

○北海道土工殖民協会Ⅱ一九三八年に北海道労働福利協会と改組。

○タアチャンⅡタコのこと。

○ひじかたさんⅡ土方のこと。

○一航海Ⅱタコとして現場へ出ること。

○白首Ⅱ酌婦。

○前ちゃんⅡ前金。

○態度がいいⅡ身なり（衣服）がいいこと。

○割り込み幹部Ⅱ名の売れた稼業人が周旋屋を通らず直接管理者を訪れ

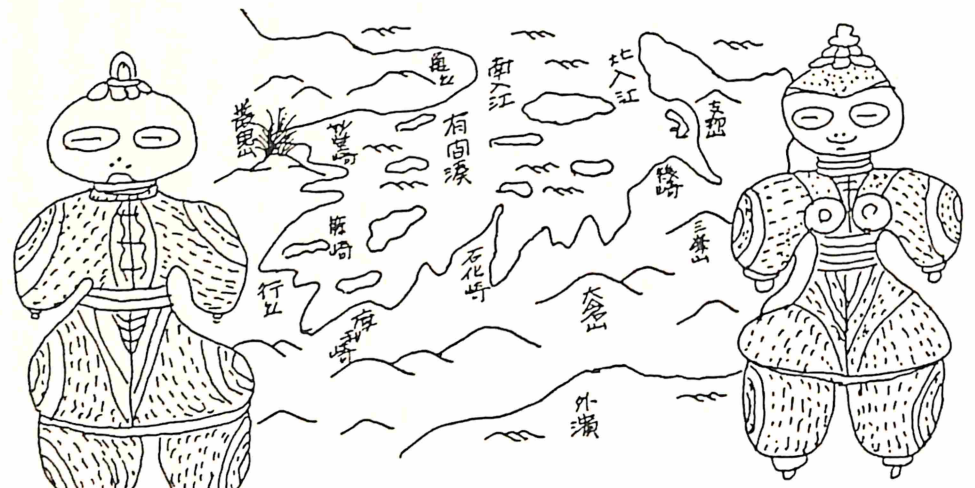
て、幹部として雇傭されること。

○しゃっこかったⅡ冷えた。

○メノコⅡ女。

○切りなげⅡ出来高払いの請負い。

つがる外三郎誌集録



鳴海勳

眼に入黒を施しは暗をも見通せるといふ意にして、口に施しは飢に窮せずといふ意なりき、髪を三輪に結ふは天地水の神を意として結ふといふ。

東日流民住原

太古時代の十萬年前蒙古依り東日流に創住せる民やあらなむ、是を阿蘇辺族と称す。住ふる処土穴居にして衣に獸皮を用ふなり、飢なるは狩獵及び漁労又は草木なる莖葉種実を得て保食とせり人の生命は三十年乃至四十年にして長寿せる者無し、男女共に入黒を好みてせざれどもよるをいやみて魔除なる呪いに用ふといふ即ち暗黒を死神と怖れ光明を生命の神として生々安住のため入黒を肌

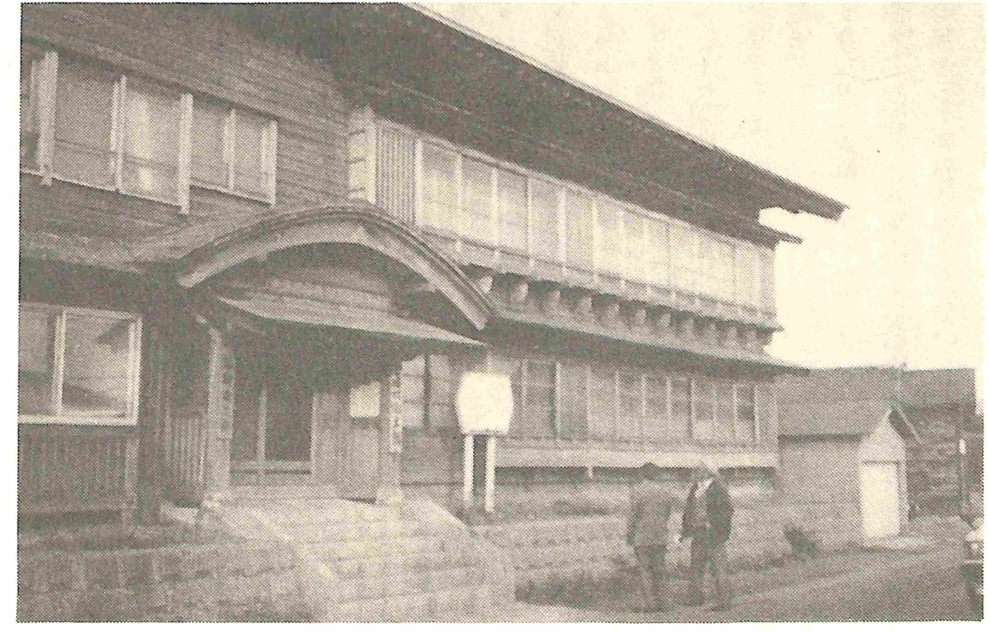
みにて生々し、住む処定まらず、樹下や岩穴にかりねせり。

東日流開闢

抑々、東日流国の開闢は今をして実に遠く、西海、北海は陸にて続く大広漠たる陸地にて、支那韓国に至れる間、皆陸なり。亦、渡島への北海も陸にて続きたり。此の世は、万物の生命もまだらにして、海に生き物住みて、貝に生命の発源なり。

以上はタコ部屋で使われている用語を掲げたが、高田玉吉記、古川善盛編の「タコ部屋一代」から引用した。

北海道泊村郷土館（旧ニシン番屋）



- オッペン||トロッコ押し。
- ひと回り||飛ぶこと。又は、旅に出ること。
- 土方の守り本尊||聖徳太子。
- 焼直し||親方の盃を返さないで、別の親方の盃を受けること。
- 態度を取る||虚勢を張る。
- 墜落||飛びつちよに失敗すること。
- 箱弁||木箱の弁当。
- ガンガン||あき街。
- タコ部屋の夕食に出されるおかずの渾名。
- ▽ 望遠鏡||フキのこと。山で採れるフキを煮物にする。
- ▽ 控訴院||ニシンのこと。生ニシンではなく、ミガキニシン。
- ▽ ハトポツポ||いろいろな豆をしょうゆで煮つける。
- ▽ カチュウシヤ||ワカメのみそ汁。カチュウシヤかわいやワカメのつさ……。
- ▽ ネコマタギ||塩マスのこと。ネコモそつぽをむいてまたいで通る。
- ヒコキ||逃亡のこと。
- ノンコ||荷かぎ。
- 背子||子分。
- 花魁土方||作業衣を崩さない。土をつけない。
- マイクライ||食事。
- マカナイ||衣服。
- オヤジ||熊。
- 募集人夫||周旋屋から前借金を受けたいわゆるタコ人夫。
- 信用人夫||前借金なしの普通の人夫。

ふなり。東日流に移り来たれる阿蘇辺族の他に津保化族ありて、地領争奪して阿蘇辺族西山辺にこもり、津保化族東北及び西浜を領住して榮ふ。阿蘇辺族、居住地噴火し自滅せる多きも、津保化族降りて居住す。依て入黒なる古習を留発すといふ。

安東浦

陸奥国安東浦とは三つの流れ集まる大入海の事なり。入潤浦とは海に望む入江を曰ふなり。未だ十三浦と稱せざる以前に東日流平地は海にして、沖浦、早瀬、行丘、船水、波止、大浦、石化、中江、立浦、荒磯、田浦、山浦の十三入江があり十三浦といふ説あり。安東浦は現の鬼沢邑なり。茲に安日彦が住居し、荒磯に弟

長髓彦が住居せり。荒磯とは現の鮎内邑なり。石化は飯積邑なり。東日流の上古は地形の変異事多くして他所にまれなる史処なり。阿蘇辺盛は巖鬼山となりて火を吐き入海流波と津浪に埋まりてその動きたるや生けるが如く地位は大平原と相成りぬ。是れを地民祖来より陸産の神なる巖鬼山岩木川を東日流の父母として崇せられ大津浪を蒙るを左の如く伝説せり。

太古東日流に山彦海彦の二神ありて入潤姫を争ふて対決は暫々なり。然るに入潤姫、海山いづれも断難く、かく曰せり海彦は海を広め、山彦は陸広めを此の勝つ勝者に嫁ぐと約せり。依て海彦は陸を刻づりて海を広めんとし、山彦は海を埋め陸を広めたり。然るに長きに渡らば他神に嫁ぐるとの入潤姫の約ありて、山彦海彦の両神は急拳陸造り海造りを懸

命にせり。海彦は大津浪を起して陸をけずり海を広むるに對して、山彦は山を噴火せしめて海を埋めたり。

東日流の山海は火石の雨逆巻く怒濤の闘々続きたりしも海彦に利なく東日流の海は陸となり入潤姫は山彦のもとに嫁ぎたり。依て海彦は是の残念を未練して尚不意成る大津浪を起して山彦入潤姫を呪ふありしも入潤姫は山彦の子を産み、東日流の海を陸に埋め産み、今尚陸を産みたりと曰ふ。然るに海彦此の未練を忙却なく、いつ大津浪を起しやも云々とる伝説ありて、東日流の新陸に住む者は海の神を鎮ましむために熊野宮を建立して崇むと云ふ。然るに海彦の呪は忿怒し、興国二年に十三浦に大津浪を起して多くの人命を奪いたるは今に語られ伝はる実証なり。

東日流大里は大海原の毎くして、長き年月に積れる葦の茎根は菹地の肥となり、海は陸地と相成り東日流六群はこの大葦原をして拓田しければ飢ゆることなし。葦は浅瀬に生茂して土を立起せしむ陸造りの草なり。吾が日本国とは葦原の国とぞ称されしに東日流の平原如き処多くして豊葦原の国とも史書に曰いふ。

一 吐 荒 族 誕 生

太古東日流の古称はスーサンポーと言弁して津輕をチパンプルと称され、是れ何れも漢語にして思ふに太古大漢土より忍び難き国乱ありて脱した漂浪の流着民の言語たりと察す。この頃我が日本国として日向一族起りて東に遠征して北上して耶麻馬台一族は北方して耶麻台国五畿七道を治領せし安日彦、長髓彦是れに討ち敗れ耶麻馬台一族は北方に脱却し東山道を落ち日高見国東日流に忍住せしも地住民なる阿蘇辺族及び津保化族の反撃に依りて宇壽前なる飛鳥山

に籠もりて城造りぬ。落着の一族男女八百七十三人にて、飢貧しければ、連れ来る馬を喰べて命脈を保つ。この山を今に祠りて馬神山と稱しけり。馬を殺したる山麓を馬食平とも稱しける処ありて今に残りける。一族の山麓六十日にして武具相備へて、先づは津保化族を安東浦に攻めて敗り、阿闍羅山に阿蘇辺族、津保化族の混合軍を一挙に攻めて降しける。

(飛鳥山の城は耶馬台城なり) 而るに中山に潜在せる津保化族の降らぬ郎党ありて、茲に耶馬台族大いに苦戦せるも、安東浦蒼海の浜に居住せる支那国よりの漂着民ありて、耶馬台族に和睦なしければ、津保化族の叛乱自から治りぬ。依て、東日流に於ては阿蘇辺族、津保化族、耶馬台族、支那漂着民との一統和睦相成りて荒羽吐族と号せる民族ぞ誕興せり。

時に安日彦命は支那民なる女秀蘭と婚じ、長髓彦命は同じく妹なる秀麗と婚じ、茲に支那王朝の習へに似て安日彦命は東領王位に君臨し安東浦なる東方稻城邑に住居けり。亦弟長髓彦は西方なる立丘邑なる処に住して君臨なしけり。依て、東日流国は、東西をして割領なし泰平なる国造りを司どれり。是れぞ荒羽吐五王の起りにして、やがては奥州を押領なし、地民を併合以て荒羽吐族の勢力大ならしむるなり。

東 日 流 柱 二

長髓彦、阿蘇辺族を討るに日向族の応戦に受けたる肩、太股の戦傷の復疫起りて蒼海立里沢田に於て、七尺六寸の大巨体で神武帝の丁亥二十七年に六十八歳にして没す。(阿蘇潤にて) 立里伝聞記に立里川に添へて一里余、濠をめぐらせし古墳あり。住民の曰く、此の墳はナガミネ盛と稱

し、亦はハガモリと稱しける。此の墳に東山面麓に三軒の民家ありて、この墳を先祖代々の墓とし、盛上にその墓処をなして遣れり。

住民な伊介翁の曰く。此の盛りは神武天皇に敵対せる長髓彦の墓と曰ふ。昔、大洪水によりて盛は崩れし、埋洞中の骸棺あらはれ、亦、多くの人骨流れたるに依りて、古人は是を十三の方に移したりと想ふ。

福島城東北に在る相内の神明宮盛は、この移墳とは、相内住民の知る人もなし。日向一族に敗れし耶馬台国の安日彦長髓彦の東日流落によりて土着のふたかたなる阿蘇辺族津保化族の反くにかかりて遂に安日彦津部化族を中山に討伐し長髓彦阿蘇辺族を行来山に討伐しける。安日彦東日流に反するまつろはぬ津保化、阿蘇辺ふたかた族を降しける、依って、茲に安日彦荒波吹く神と活神として君臨せる。

古来東日流の海辺に漂い来る異族は支那金国韓国の流民多く安日彦菹蘇潤に暮らしける金国の民者金孫武と曰しける者の娘秀蘭を室として迎へける。東日流の入潤は安東浦と稱し、亀甲丘に住みにける是を荒波吹丘宮と号し所政を置きて一君五部と曰す司所設ければ東日流普天下反目なき泰平を得たりき。

時に耶馬台国には、安日彦、長髓彦が五畿七道に君臨して日向一族の侵領に應戦せり。やがては日向一族も耶馬台一族の強い応戦に苦戦し、多くの死者をいだせるも、援軍続々と筑紫全土より徴発して、遂に耶馬台国掌中にせり依りて、安日彦は深傷なる弟長髓彦を護り乍り、山を越え谷渡り一族の者を俱に北に落ち忍びて、東日流に来たるや、広漠たる津輕の葦原を目にするや、これぞまさしく日本中央にして吾が新しいき国土を起さんとて、農を以て拓せり、米、麦、豆、粟、芋など冬に保ち

養を収したり。東日流の平野は田畑のみ

稲作はホコネと曰ふ稲穂なり、遠く韓国より来たる種なり。この稲は寒さに強く、亦、寒冷の水にも強き故に東日流はまたたくまに拓田の盛んならしむる兆しとなれり。然るに草原は海の彼方まで茂り、津軽に葦のつきるなけれ東日流野の葦の芯を以て強し、住む人、亦、然り。風になびき流れに逆らはず、眼に弱しと見えども風雪や雨に強く、亦、朽ちがたし。

安日彦は東日流入潤の南崎に居を置き、秦の漂民なる女秀蘭なるを室女とし子息十男六女ありて奥州五王の酋長に君座せり。その系譜に証す。

安比奈（東日流一世）宇止奴（東日流二世）卒止奴（鮑田三世）安彦（鮑田四世）髓奴（鮑田五世）惠比須（東日流六世）河髓（岩手七）建比奈（越州八世）安奴（鮑田九世）一長安一字曾利（東日流十世）毛津奴（岩手十一世）津刈（岩手十二世）安津奴（岩手十三世）高彦（東日流十四）安長（鮑田十五）

荒吐族、安長をして支那国なる異土船とぞ交易なし、一族の智者支那安東に渡りて国政を学ぶ。

北斗の地位に於て寒冬敲しきも、山海の幸無窮なれば飢ゆるなく、人たる交李また睦間じき哉。

一汁一食たりとて我にせざる相互救済に生々し、君主とて自からも高御倉に安座せず、衆と俱に農を営み、狩漁なし冬寒の期に衣食を蓄へ、富貧なき民の生々を保つこと一義とせしは、今の世にうちやむべき養の国造りなり。

凡そ、荒吐族とて君臨せし後世に於いてをや、故地耶馬台国奪回を諦らむなく、子孫に遺言とて代々語り継ぐは、一族の執念深きに依れるも

夷征

蝦東

奪回せんと度々大和王軍と乱をなせり。依て天皇継君を空位ならしむることしばしばなり。依て大和の朝は征夷として奥州を討伐せんとしるも敗れて荒吐一族を夷人として爾来敵視せり。蝦夷とは、支那国王夷王の頃より東日流に土着せる起原に稱して号せられたる故なり。亦、民族発祥の地は東日流なりせば、大和朝も津軽国は皇宮の鬼門に当る処位にあり是を犯しては災起るとし奥州に征夷しとも是を侵領せしことなけん。依て都より罪を犯したる者よく東日流の地に逃着して住む者古来より多き也。

倭朝は東北を蝦夷と稱し、永元癸巳五年、武内宿禰坂東及び奥州日高見国に荒吐の強威に驚きて帰る。荒吐族を蝦夷とぞ稱しける。亦、永初庚戌四年、日本武尊東国に荒吐族討伐せんとせるも敗れて帰遁す。

升平己未三年、陀加角丸荒吐王に立君にし、（大和丁卯二年）人皇第十六代仁徳帝の戊辰五十六年十三湊に韓船の往来せるをとどめんととして、上毛野田道將軍東日流に遠征し荒吐族に韓人追放令を命ぜるも荒吐王安東丸是に服せず遂には内三郡の田舎郡にて合戦せるも田道軍敗れて行丘に脱せるも荒吐族の追手是を許さず俱に六百八十余名を挙げ東日流中山にて荒吐一族を賦貢に制せんとせるも田道將軍は肩に傷を受け架冷沢に死す。田道軍中山に脱し、田道將軍の骸を葬れり。此の地の奥なる味噌盛と稱す処なりと地民曰く。亦、此処には古墳ありて健全なる形を保て実在す。

斉明帝の頃奥州の荒吐五王が難波に招せられ冠二階を授られたるも、津軽のみは是に応ぜぬ。然るに斉明帝四年四月荒田井比羅夫、荒吐神青龍、葛城の嶺に飛行し、胆駒山に隠るるや住江に現われ、北方に去ると

のなりき。

安日彦は、七尺二寸の大巨体なるも神武帝の甲午三十四年七十二方にて移夷地の田沢丘に老令に依つて入滅す。

東日流安東浦なる移夷地の沢田盛に古き古墳降り、是を世に伝へて安日彦之墳と曰ふ。亦、蒼海に立里古墳ありて、是を長髓彦之墳と曰ふ。

依て、是は安部一族大祖之二祖御遺骸の埋蔵処なるも、両処流水辺にして流土甚々だしきに依りて顯王の丙寅十四年波奈輪彦（安東丸）の世に入潤郡（於瀨洞）（有潤）（仁徳帝御宇三十年五月）に再葬せり。

流祖 東八

耶馬台国長髓山彦命東日流に君臨せるは既に東日流と稱されし後なり。抑々東日流と申せる起りは晋の君公子一族国乱ありて渤海より新国を求めて東に海跋を越え着土せる処は東日流なり。

東日流と稱せる以前は耶馬奥と稱し、鹿、熊、馬の牧遊せる他人跡なき処なり。晋の君公子一族着土以来此の国を讀じて曰く、東の方に日の流るる国なる故に東日流と稱したるは東日流と稱されし創なり。

依て長髓彦に六男二女の息胤あり。一男宇馬彦（有間郡）二男於貴利彦（奥法郡）三男破奈和彦（鼻華輪郡）四男比羅化彦（平賀郡）五男伊那化彦（田舎郡）六男伊留馬彦（江流間郡）一女曾止奴（外浜怒賀部）二女怒賀部（糠部）と稱してこれを東日流八祖となしたり。

以来、荒羽吐族は此の八祖をその領区に君主として崇み、その領域は榮たり。

爾来荒吐族は奥州六郡及び東国一円に大威勢を張駐し故地耶馬台国を

曰ふ奇怪なるを多く見届け衆倭人大いに怖む。

依て、これ蝦夷の反逆なる兆とて宣して帝は蝦夷討伐を比羅夫に勅令す。

依て、比羅夫兵船百八十艘を整へ。兵一万人を乗せて越州拍津を發せるに、鮑田、淳代の奥州に寄りけるば、地の荒吐族海辺に地湧の油を燃やして上陸をはばみ、これなる地は汝らが倭朝の鬼門に当る地位なれば好みて戦いを為せるは荒吐神なる吾が地の神怒りて、汝らを罰せむと曰くせば、比羅夫、尚浜に舟を寄せなむに、荒吐族のハタなる小舟その軍船を囲みて火箭を海に射るや、海上燃え、比羅夫の軍船次々炎上しける。

依て比羅夫、授兵として大華下阿曇比夫連、小華下河辺百枝臣、大華下安阿引田比羅夫臣、大山上物部連熊、大山上守大石らを以て、兵船百八十艘を連ね、東日流安東浦及びお後瀉に寄せ来るも、荒吐族なる五王皆兵起こして応戦しけるに、荒田井比羅夫、復た降伏しけるに、沖泊の兵船みな遁げる失せぬ。

かくあるを日本史曰ふところみな偽りて遺せるは、実に以て笑止なりき。而て、斉明帝白鳳五年比羅夫再挙の軍船をひきいて東日流在潤郡西浜に来襲し、荒吐族、是れに応戦し、倭の軍船を撃沈す。比羅夫茲に和睦を以て交せむ船積の酒肴を以て献じ荒吐一族と大宴せむ油断を計りて討たむせるも、荒吐の陣十重二十重にて羊蹄の如き防備に屈し、依て降伏しその証として、総ての貢物を及び船などを荒吐一族に献じ、荒吐五王津刈丸及び国到安国等三將に安倍の性を授けたりと曰ふ。

天応元年九月中納言継縄、大伴益立、紀古佐美、安部家麿、藤小黒麿、を以てその兵三万四千人を以て討伐に及びしが、荒吐族が五王俱々これに應戦し、遂には倭軍いたく敗れて遁走せり。